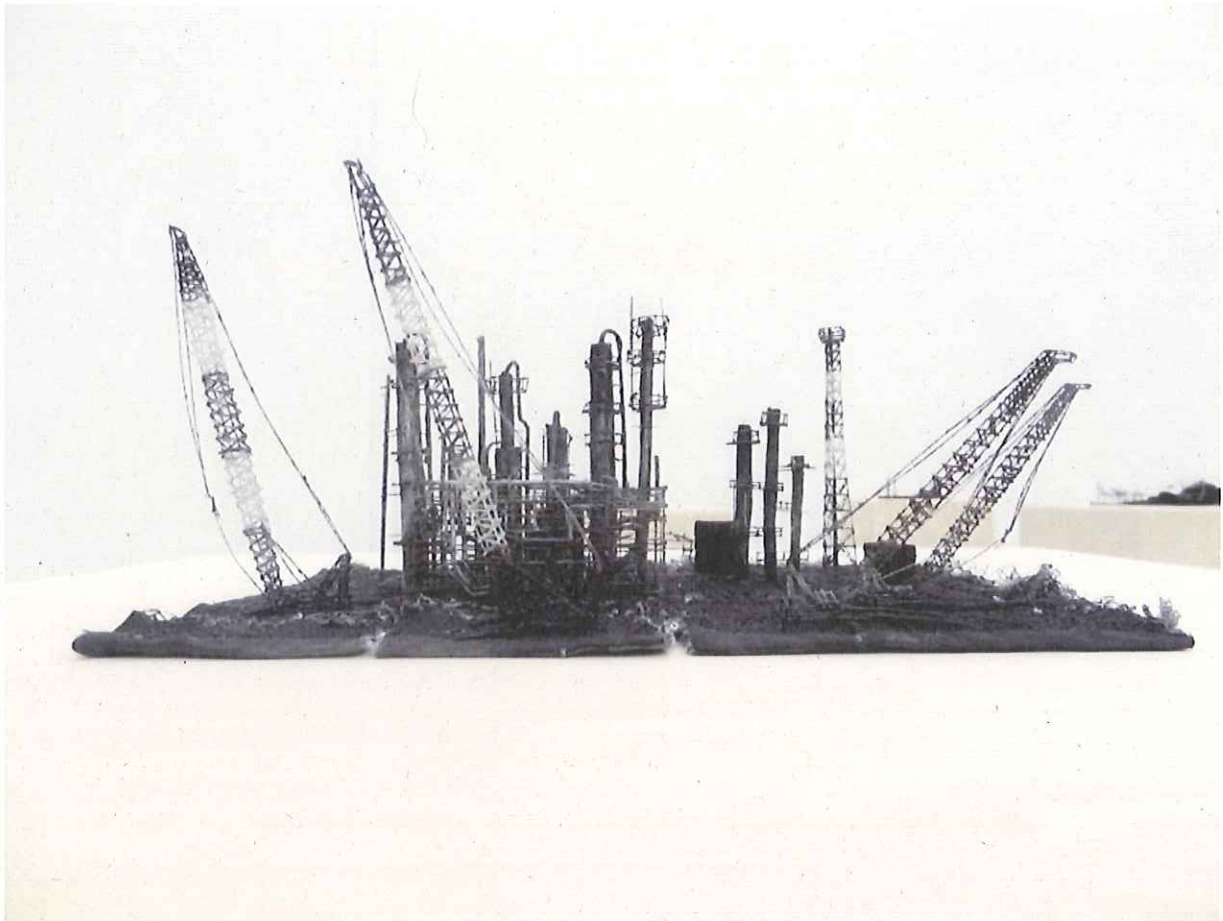


第57回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展
日本館キュレーター指名コンペティション
企画提案書

出品作家： 岩崎貴宏

展覧会名： Floats



平成28年4月27日

企画提案者： 鷺田めるる（金沢21世紀美術館）

○展覧会の基本構想（コンセプト）

（1）もうひとつの「日本」

ヴェネチア・ビエンナーレは、国別参加方式を残している。もちろん日本館もその一つである。経済のグローバル化や移民の増加とともに、国家という枠組みは自明ではなくなりつつあるが、依然として国境が一定の役割を果たしていることも事実だ。本展では「日本」という枠組みを前提として積極的に捉えた上で、リアルな日本の状況を掬い取る試みを行いたい。

日本全体の人口減少と高齢化の影響を、地方は強く受けている。第一次産業が縮減し、都市部の第三次産業が生み出す富の再分配に依存せざるを得ない。そのバスターとして、発電所の立地となるなど都市のバックヤードとしての機能を担わされている。また消費の面でも、大資本による画一的なショッピングモールなど、資本の論理に巻き込まれ地方の自立が困難である。

これまで日本の現代美術は、東京など都市部の美術と同一視されてきた。それに対し、本展では、地方でむき出しになるもう一つの日本を示したい。日本の地方が抱え込む問題には、世界の成熟社会がいずれ直面する。国境を越えて問うべき課題である。

（2）日本館の建物を再評価する

1956年に完成した日本館は、映像やインスタレーションなど今日の美術の展示には必ずしも適しているとは言いがたい。だが、吉阪隆正による建物は、モダニズムの建築言語を駆使した魅力的な建築である。既存の木を避けながらピロティを設けて展示室のボリュームを持ち上げ、天井から自然光を取り入れている。このチャーミングな建物を仮設壁などで隠してしまうのではなく、空間の魅力自体を引き出し、直截に感じられるような展示としたい。

（3）祝祭都市にふさわしい展覧会

ヴェネチア・ビエンナーレでは、来場者は高温多湿の季節に膨大な数の作品を見てまわることになる。近年、見るのにあまりに長い時間を要する映像作品や、あたかも新聞を読むかのように内容を読み込まなければ理解が困難なアーカイヴ的な作品も増えているが、ドクメンタならいざ知らず、祝祭的な観光都市ヴェネチアには、見る楽しみや驚きを与えるような作品がふさわしい。とはいえ、奇をてらったような展示ではなく、美術の歴史を踏まえながら丁寧に作り込まれた作品をシンプルに、オーソドックスに提示したい。

○出品作家：岩崎貴宏

展覧会は岩崎一人の個展とする。若手から中堅のアーティストであるが、海外での発表は多い。これまでの代表作を集大成的に見せる。

○出品作家の選定理由

(1) 「日本」的：儂い彫刻、見立て、細かな手仕事

美術が非物質化する方向で展開するなかで、岩崎の作品は、彫刻、立体作品の今日的なあり方を追求していると言える。素材は極めて日常性の強いもので、雑巾や髪の毛などゴミに近いものもある。さらに「見立て」のような手法で、イメージを重ね合わせていくことにより、一見乱雑で無秩序に見えるものに、ある秩序を見いださせるような作品である。日本の立体作家では、高柳恵理や富井大裕に近いといえるだろう。美術の非物質化は世界的な傾向だが、荒々しい肉体性や政治性ではなく、クリーンで儂い感覚は日本的（厳密には「弥生的」）とも言えるかもしれない。「見立て」もまた、日本の伝統である。岩崎のもう一つの特徴は、非常に細かな手仕事にある。乱雑に投げつけられた雑巾やタオルの山を、自然の山の美しさに転換する梔子にあたる部分に、1ミリ以下の繊細さで細かな手仕事が施される。工芸的な濃やかさもまた、もう一つの日本らしさと言えるのではないだろうか。

(2) 地方

広島で生まれ、現在も広島を拠点に制作を続ける岩崎は、日本の地方が置かれた状況と向き合ってきた。岩崎は代表作の《Out of Disorder》で、山をつたって伸びる電線の鉄塔をモチーフにしている。日本の地方の特殊な風景として、岩崎が早くから注目してきたモチーフだが、福島第一原子力発電所の事故以降、電力は地方で作られ都市部へと送られていることが意識化されるようになったため、岩崎の鉄塔の作品には、中継地でありながら素通りされてしまう地方のリアリティも容易に読み込むことができるようになった。他にも、高度経済成長期には海沿いに押しやられながら日本の経済を支えたものの、海外への生産拠点の移動や第三次産業の主流化によって見捨てられたような存在になっている海沿いの工場や、かつてのレジャー産業を象徴する観覧車など、地方にはまだ残る昭和の遺産に目を向けている。

(3) コンテキスト

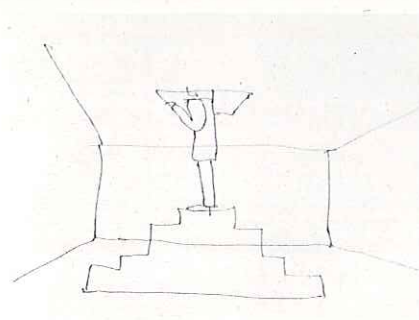
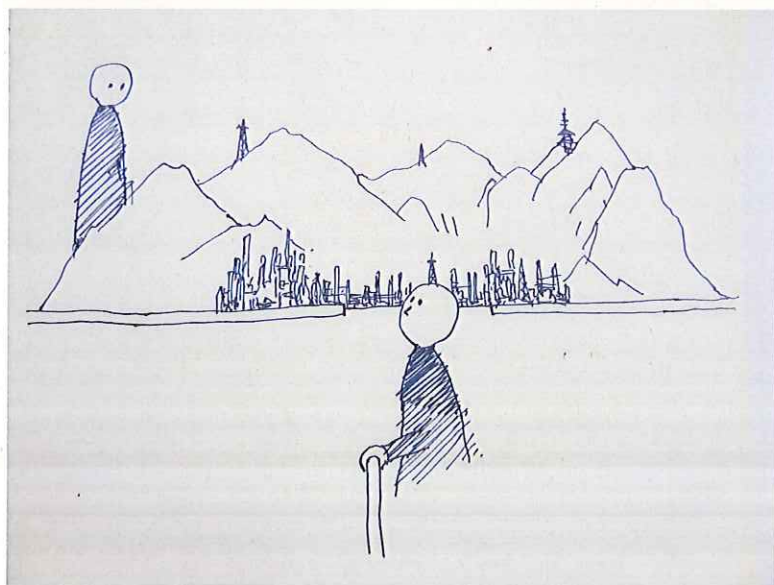
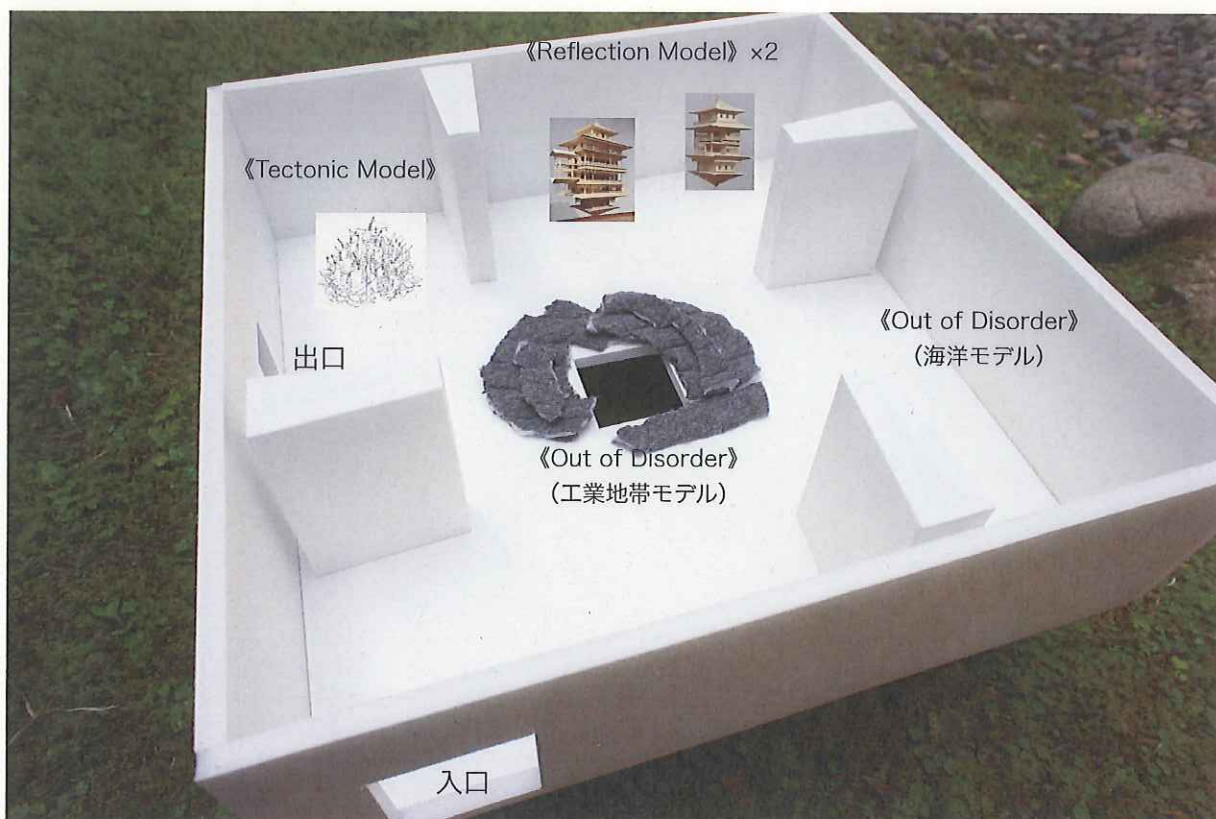
岩崎は、空間的、場所的なコンテキストを踏まえて作品を制作できる作家である。例えば、私が企画した岩崎の展覧会は、夏に古い町家を会場として行われたが、岩崎は、昼の空間に合わせて布団と蚊帳をモチーフとした作品を展示した。黒部市で展示をした際にも、本のしおりをクレーンにした作品を展示していたが、黒部ダムの建設を描いた吉村昭の『高熱隧道』の文庫が使われていた。また岩崎は、即興的な対応もできる。私が企画した展覧会では、設営前には予定していなかった作品を宿泊先で制作し、展覧会直前に追加した。それは床の間に置いた雑巾の作品で、雑巾は会場の掃除につかったものであり、モチーフは床にかけられた軸に関連するものだった。ヴェネチア・ビエンナーレ日本館のように、床に窓があり特徴的な壁もある空間で、新作のインスタレーションを展示しようとする際、岩崎の空間を読み込み、対応できる能力は生きてくるに違いない。

○展示プラン

(0) 全体計画

新作の《Out of Disorder》2点、旧作の《Reflection Model》2点、新作の《Tectonic Model》1点を中心に、小さな作品数点を展示する。

仮設壁は設けずに部屋全体を見渡せるようにし、トップライトの自然光を活かす。床の開口部も技術的に可能ならば、ガラスを取り外して活用する。ピロティに階段を仮設し、階段を上ってメインフロアの床の開口部から顔を出せるようにする。それによって、床に置いた《Out of Disorder》（工業地帯モデル）を低く近い位置から見えるようにする。



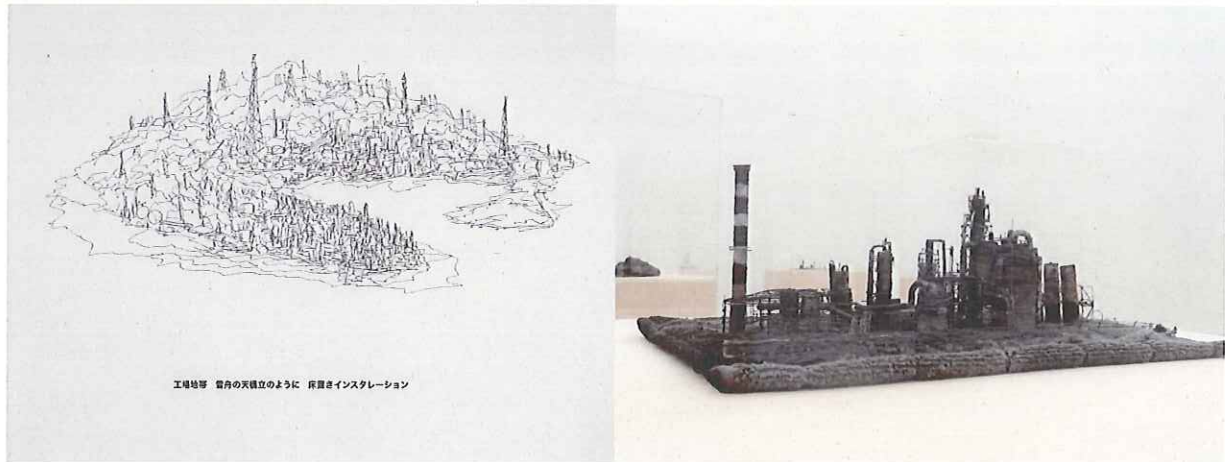
ピロティに階段を設け、メインフロア床の窓から作品を見られるようにする。上から見ると牧歌的な山の風景、ピロティから見ると、乱立する工業地帯。外側の牧歌的風景が、内側の黒い工業風景を覆い隠す。螺旋階段も検討する。

(1) 《Out of Disorder》

A 工業地帯モデル（新作）：メインフロアの中央に床置き
国内の産業やエネルギーを支えてきたススけた科学工場の伽藍（日本の工場のミックス）。

参照：雪舟《天橋立図》

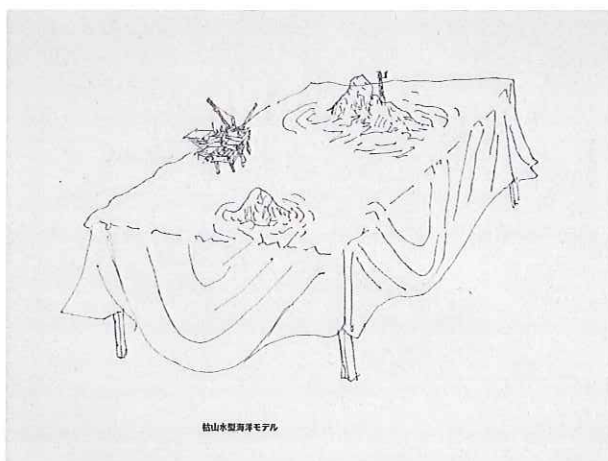
素材：墨汁+雑巾（墨汁は木のスス）もしくは、汚れを拭き取ったグレーの雑巾。



B 海洋モデル（新作）：メインフロアの一角に机を置く
国内の工業地帯のモデルに対し、自国と他国の境界線を揺さぶり続ける海洋資源開発のオイルリグとその島々（匿名）。横から水が流れるように皺が出来る。

参照：龍安寺方丈庭園

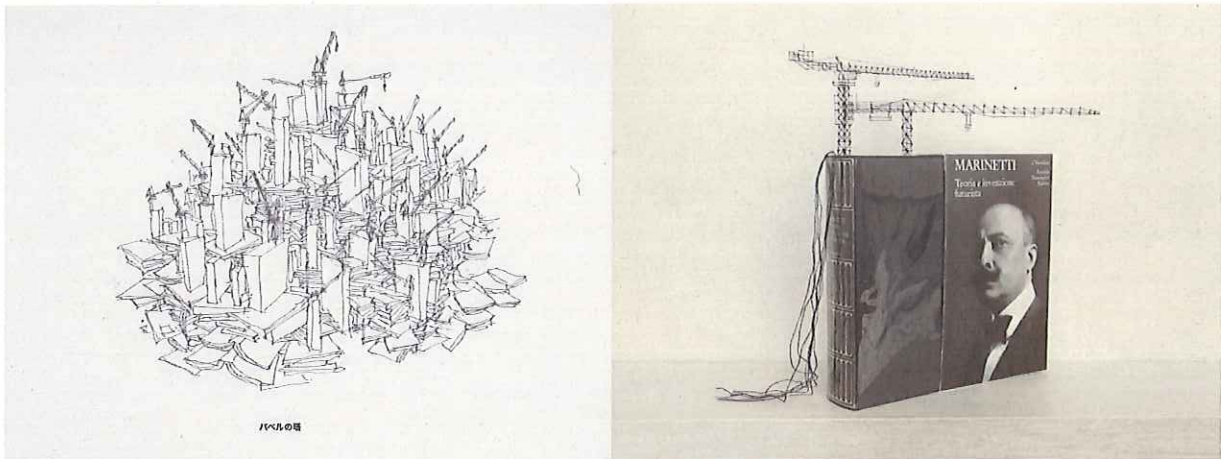
素材：石油をイメージした黒いタオル、もしくはビニール、黒い化繊布、シーツ



(2) 《Tectonic Model》（新作）：メインフロアの出口近くの床

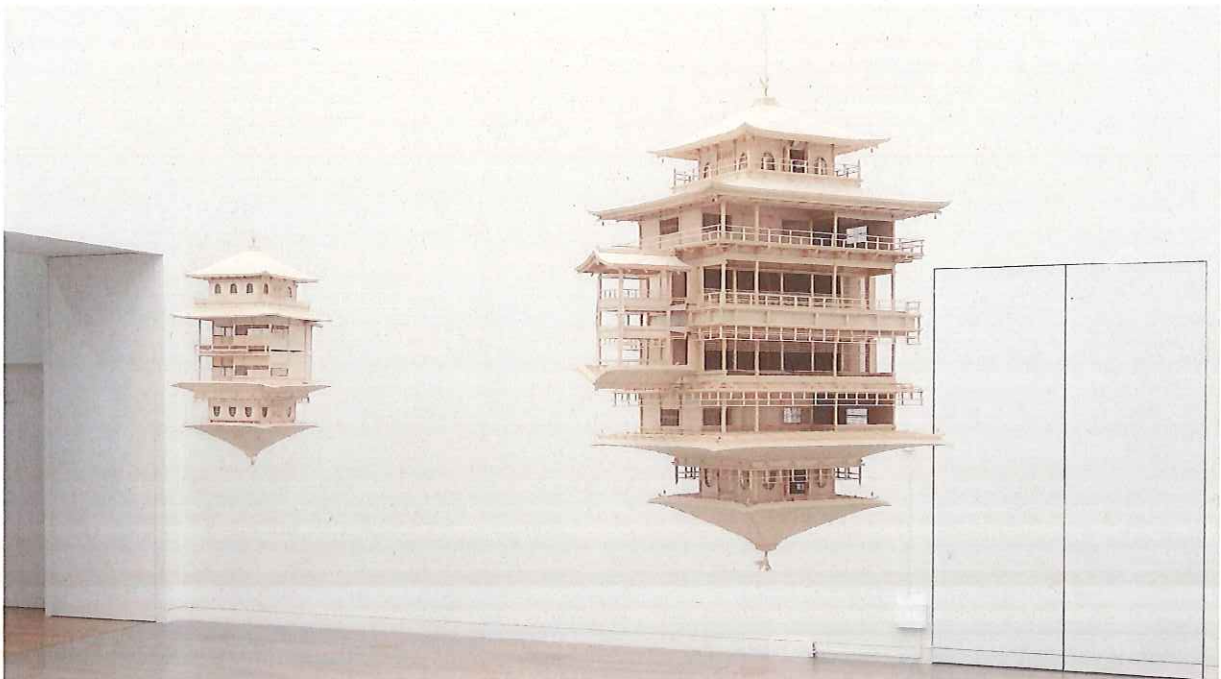
本を積み重ねてバベルの塔のような構造を作る。栗からクレーン。最下部は、本を広げたまま裏返し、層状に積み重ねる。地層・断層、構造の不安定さを示す。

本のタイトルをある程度コントロールする。忘却、科学、歴史、自然などに関する洋書。規模はスペースに合わせる。巨大なものも作ることができる。



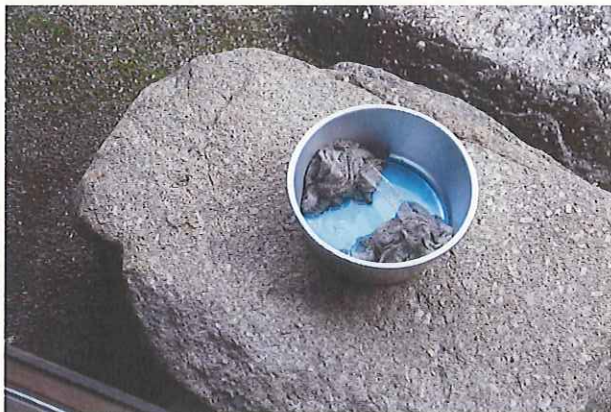
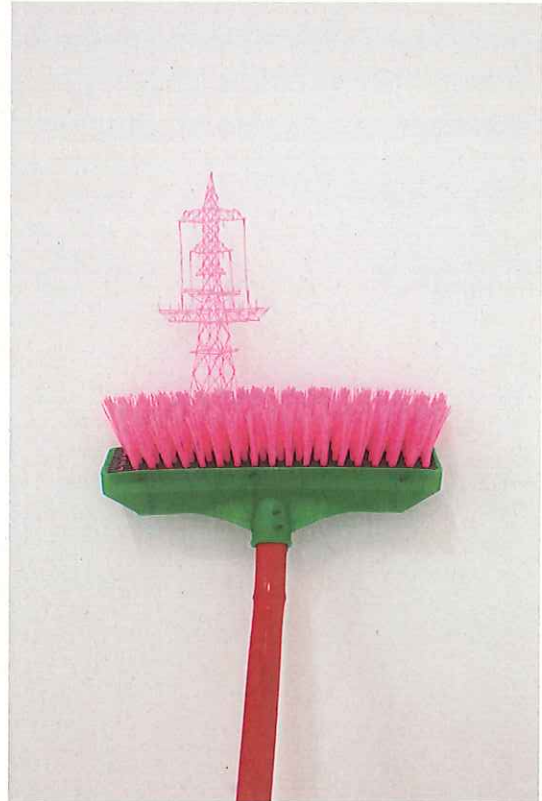
(3) 《Reflection Model》（旧作、作家蔵）：メインフロア入り口反対側に天吊り

金閣、銀閣が水面に反射するモデル。素材は檜。展示空間に垂直の要素を加える。入り口からは手前床に水平的に広がる《Out of Disorder》、奥にこの《Reflection Model》。



(4) 壁面等

小さな作品を会場各所に多数ちりばめる。発見しながら巡ってゆく楽しさ。展示空間に合わせて即興的に加える可能性もある。



○展覧会タイトル：Floats

《Reflection Model》は、水面を介して反射した像である。2つの《Reflection Model》を空中に吊れば、2つの見えない水面が生まれる。さらに2つの《Out of Disorder》でも床のレベルと机のレベルに2つの水面が存在する。一つの展示空間の中に、いくつもの高さの異なる水面が生まれ、作品はそこに浮かんでいるようにも見える。《Tectonic Model》もまた、確固としていない大地に無理に建てられた建造物を示唆しており、「浮かんだもの」と言える。そもそもヴェネチアも水上に浮かぶ都市であり、その公園にピロティで地面から切り離された日本館も浮かんでいる。そのことから、複数形の「浮かぶもの」、Floatsを展覧会名とした。

○出品作家プロフィール

岩崎貴宏 (いわさき・たかひろ)

昨年、黒部市美術館と小山市立車屋美術館で個展を開催。

リヨン・ビエンナーレ、アジア・パシフィック・トリエンナーレなど海外の国際展の経験も豊富。

1975

広島県生まれ

2003

広島市立大学芸術学研究科博士後期課程修了

2005

エジンバラ・カレッジ・オブ・アート大学院修了

現在広島在住

■主な個展

2015

「In Focus」Aron Gallery、アジアソサエティ、ニューヨーク、USA

「岩崎貴宏展 埃 (10-10) と刹那 (10-18)」小山市立車屋美術館、栃木

「岩崎貴宏展 山も積もればチリとなる」黒部市美術館、富山

2014

「Takahiro Iwasaki: Itsukushima Reflection Model From the NGV Collection」National Gallery of Victoria、ヴィクトリア国立美術館、メルボルン、オーストラリア

特別展示 岩崎貴宏「Out of Disorder」川崎市市民ミュージアム エントランス、神奈川

2012

「メタフレーズ・シーナリー」ARATANURANO、東京

2011

「アウト・オブ・ディスオーダー (白い山脈)」3331 Arts Chiyoda、東京 (1年間展示)

「ノン・ローカリティー」ナッサウシャー・クンストフェライン・ヴィースバーデン、ドイツ

2010

「フェノタイピック・リモデリング」ARATANIURANO、東京

「構造相転移モデル」アート | 41 | パーゼル アートステートメント、スイス

2006

「アウト・オブ・ディスオーダー」カリニングャラリー、ファイフ、スコットランド

2005

「ディファレンシャル/インテグラル カリキュラス」スリーパー、エジンバラ、スコットランド

2003

「模型にいたる次第」空間造形工房、広島

■主なグループ展・プロジェクト

2016

「パラドキシア」CASA CAVAZZINI Museo d'Arte Moderna e Contemporanea、ウディネ、イタリア

「コレクション展：収蔵品ピックアップ」川崎市市民ミュージアム、神奈川

2015

「日産アートアワード2015」BankART Studio NYK、神奈川

「INVENTO -The Revolutions That have Invented us-」OCA Museum、サンパウロ、ブラジル

「横浜美術館コレクション展 2015年度 第1期 身体からかんがえる コレクションにみる身体表現—現代美術を中心に」横浜美術館、神奈川

「We can make another future: Japanese art after 1989」Gallery of Modern Art (GOMA)、プリズベン、オーストラリア

2014

- 「17th DOMANI・明日展」国立新美術館、東京
- 「ヨコハマ・パトリエンナーレ2014」象の鼻テラス、神奈川
- 「手づくり本仕込みゲイジユツ」 はじまりの美術館、福島
- 「Duality of Existence - Post Fukushima A group exhibition of Contemporary Japanese Art」 Friedman Benda、ニューヨーク、USA
- 「第8回深圳彫刻ビエンナーレ」 OCT Contemporary Art Terminal (OCAT)、広東省、中国
- 「スリーピング・ビューティー」 広島市現代美術館、広島
- 「Paradise Garden」 MA2 Gallery、東京
- 「Lost in Landscape」 トレント・ロヴェレート近現代美術館 (MART) 、ロヴェレート、イタリア
- 「transxform in Delhi」 国際交流基金、ニューデリー、インド
- 「Public Art Research Center [PARC3:small world] 」 札幌駅前通地下歩行空間、北海道

2013

- 「Now Japan」 Kunsthal KAdE、アムスフォールト、オランダ
- 「Hidden Dimention」 Gallery Skape、ソウル、韓国
- 「ハートオープン」 SHIBAURAHOUSE、東京
- 「Everyday Life : 2013 Asian Art Biennial」 国立台湾美術館、台中、台湾
- 「transxformーかたちをこえる」 国際芸術センター青森、青森
- 「Very Fun Park 2013」 台北、台湾
- 「小さな世界へようこそ！ー5人のアーティストと美術館コレクションのすてきな出会いー」 高松市美術館、香川

2012

- 「フランス・オブジェクト・シンボル」 パレド・トーキョー、パリ、フランス
- 「第7回アジア・パシフィック・トリエンナーレ (APT7)」 クイーンズランド州立美術館、ブリスベン、オーストラリア
- 「オブ ヒューマンスケール アンド ビヨンド」 香港アートセンター、香港
- 「開館記念企画展 UTOPIA - 何処にもない場所 -」 ART BASE百島、百島、広島
- 「岡崎ART&JAZZ2012」 岡崎市、愛知
- 「アンドソー オン アンドソー フォース」 キム?コンテンポラリーアートセンター、リガ、ラトビア
- 「Becoming: worlds in flux」 c24ギャラリー、ニューヨーク、アメリカ
- 「ダブル・ビジョン：現代日本美術展」 ハイファ博物館群、イスラエル
- 「アフターゴールド」 コーク・アビー、イギリス
- 「マイクロコントロール: パッセージトゥ ザ シークレット オブ アート」 Chunchi Gallery、北京、中国
- 「ダブル ビジョン：現代日本美術展」 モスクワ市近代美術館、モスクワ、ロシア

2011

- 「ヴィラ トーキョー」 京橋エリア周辺、東京
- 「ヨコハマトリエンナーレ2011 Our Magic Hour - 世界はどこまで知ることができるか?」 横浜美術館、横浜
- 「WALKING THROUGH... MUDAM COLLECTION」 ジャン大公近代美術館、ルクセンブルク
- 「ラストワランデ 11 RAW」 オウテ・ワランデ公園、ティルブルク、オランダ
- 「ア・コンスタレーション・オブ・アイデアズ」 コーナーハウスギャラリー、マンチェスター、イングランド

2010

- 「かざなわ燈涼会」 榎荘、金沢
- 「手感的妙」 就在芸術空間、台北、台湾
- 「ビエンナーレ・キュベイ」 OK、リンツ、オーストリア
- 「知覚の扉II」 あいちアートの森 豊田プロジェクト、喜楽亭 (豊田市美術館) 、愛知
- 「エブリデイ(ズ)」 カジノ現代美術フォーラム、ルクセンブルグ

2009

- 「アジア現代美術プロジェクトーシティ・ネット・アジア2009」 ソウル市立美術館、韓国
- 「日常のスペクタクル」 第10回リヨン・ビエンナーレ、リヨン現代美術館他、フランス
- 「いざ、船内探検! 吉宝丸」 展 広島アートプロジェクト2009、広島市環境局中工場、広島

2008

- 「日常の喜び」 水戸芸術館現代美術センター、茨城
- 「クローズアップ」 アドボケーテッド・クロース、エジンバラ、スコットランド
- 「屋外に住みたくはないけれど、たまになら」 ルーム、ロンドン、イギリス

2007

「六本木クロッシング2007 未来への脈動」森美術館、東京

「リバーシブル」スコットランド国会議事堂、エジンバラ、スコットランド

「旧中工場アートプロジェクト『ゴミがアートになる！超高品質なホコリ』」展（企画担当）、広島市環境局旧中工場、広島

■受賞

2011

平成23年度 ポーラ美術振興財団在外研修員 ポーラ美術振興財団

2007

平成19年度新進芸術家海外留学制度研修員 文化庁

■コレクション

ヴィクトリア国立美術館、メルボルン、オーストラリア

Kadist Art Foundation、サンフランシスコ、アメリカ

クイーンズランド州立美術館、ブリスベン、オーストラリア

高松市美術館、高松

ジャン大公近代美術館、ルクセンブルグ

森美術館、東京

ロイヤル・インファーマリー・エジンバラ、スコットランド

横浜美術館、神奈川

高橋コレクション

日産アートコレクション、神奈川

川崎市市民ミュージアム、神奈川

○キュレータープロフィール

鷺田めるる (わしだ・めるる)
金沢21世紀美術館キュレーター

2010年、金沢青年会議所が主催して町中各所で展示する「かざなわ燈涼会」にキュレーターとして関わり、岩崎に出品を依頼。「榎荘」という町家で展示した。2015年、『美術手帖』に岩崎の黒部市美術館、小山市立車屋美術館での個展の展評「転倒の限界」を執筆。

1973年京都市生まれ。東京大学大学院美術史学専攻修士課程修了。1999年より金沢21世紀美術館建設事務局学芸員として美術館の立ち上げに携わる。

地域や参加をテーマに現代美術や建築の展覧会を企画する。これまで手掛けた主な展覧会に、「妹島和世＋西沢立衛/SANAA」(2005)、「人間は自由なんだから:ゲント現代美術館コレクションより」(2006)、「アトリエ・ワン:いきいきプロジェクト in 金沢」(2007)、「金沢アートプラットフォーム2008」(2008)、「イエッペ・ハイン:360°」(2011)、「島袋道浩:能登」(2013)、「3.11以後の建築」(2014)、「坂野充学:可視化する呼吸」(2016、以上すべて金沢21世紀美術館)などがある。2009年、ゲント現代美術館との学芸員交流事業で半年間ベルギーに滞在。

○予算案

関係者旅費	350万円	
作品制作費	500万円	(タオル、《Tectonic Model》の本等の現地手配合む)
作品輸送	400万円	(主に旧作《Reflection Model》。船便。保険料込。)
会場施工費	800万円	(サイン、ピロティの階段、《Reflection Model》吊り)
現地管理運営費	1000万円	
カタログ制作費	400万円	
広報費	300万円	
記録費	20万円	
通信費	20万円	
その他	210万円	
合計	4000万円	

○掲載写真クレジット

p. 1

《アウト・オブ・ディスオーダー(川崎シリーズ/日本ゼオン)》
川崎市市民ミュージアム蔵
©2014 Takahiro Iwasaki, Courtesy of ARATANIURANO
Photo: Takahiro Iwasaki

p. 5

《アウト・オブ・ディスオーダー(川崎シリーズ/東亜石油1)》
川崎市市民ミュージアム蔵
©2014 Takahiro Iwasaki, Courtesy of ARATANIURANO
Photo: Takahiro Iwasaki

p. 6上

《テクトニック・モデル (マリネッティ) 》
©2016 Takahiro Iwasaki, Courtesy of ARATANIURANO
Photo: Takahiro Iwasaki

p. 6下

《リフレクション・モデル (金閣)》 《リフレクション・モデル (銀閣)》
©2014 Takahiro Iwasaki, Courtesy of ARATANIURANO
Photo: Takahiro Iwasaki

p. 7左上

《アウト・オブ・ディスオーダー (コンプレックス) 》
©2010 Takahiro Iwasaki, Courtesy of ARATANIURANO
Photo: Takahiro Iwasaki

p. 7左下

《アウト・オブ・ディスオーダー (京橋) 》
©2011 Takahiro Iwasaki, Courtesy of ARATANIURANO
Photo: Keizo Kioku
Photo Courtesy: Kurumaya Museum of Art, Oyama City

p. 7右

《アウト・オブ・ディスオーダー (ピンクデッキブラシ) 》
©2013 Takahiro Iwasaki, Courtesy of ARATANIURANO
Photo: Meruro Washida